

ジェンダーの視点から読み解く人権
—アルゼンチンとメキシコの事例から—

責任者：浅倉寛子（社会人類学高等研究所: CIESAS）

○報告者

伊香祝子（慶應義塾大学）「メルセデス・ソーサの作品に見る女性像—1970年代を中心に—」

浅倉寛子（CIESAS）「ジェンダーと移民—中米移民女性の事例から—」

山本昭代（慶應義塾大学）「ジェンダーとメキシコ・麻薬戦争」

○討論者

Marta Torres Falcón（メトロポリタン自治大学アスカポツァルコ校）

昨今、人権に関する議論が活発になってきている。しかし、この「人権」というものは、全ての人々に同時期に平等な形で与えられたものではない。例えば、1993年にウィーンで行われた国連の世界会議で、「女性の権利は、人権である」と認められるまで、女性は「人間」というカテゴリーから排除されてきた（Facio, 2011）。よって、20世紀初頭に、国際合意によって明確に女性の権利が人権として承認されたことは、現代史において達成された最も象徴的な事象の一つと言える（Maqueira, 2018）。本パネルでは、学際的な視点から、アルゼンチンの歌手 Mercedes Sosa（伊香祝子）と中米移民女性（浅倉寛子）、メキシコの強制行方不明者（山本昭代）の3つの事例研究をもとに、討論者として、ジェンダーと人権に関するスペシャリスト Dra. Marta Torres Falcón を招いて、「女性の人権」というものについて議論する。

伊香が発表するのは、「ラテンアメリカの人権と生命の声」（エル・パイス紙、2019年1月31日）と多くの人々が認めるアルゼンチン出身の歌手メルセデス・ソーサ（1935～2009）。無伴奏で1曲だけ歌った1965年のコスキン・フォルクローレ・フェスティバルが、彼女の実質的な全国デビューの場となった。これ以降、海外での公演や、『アルゼンチンの女たち』（1969）、『ビオレッタ・パラへのオマージュ』（1971）、時代の空気を反映した『勝利の時まで』（1972）など代表的なアルバムの録音を行うようになり、1972年にはコロソ劇場でも歌った。70年代後半にはいると軍からの迫害が強まり、1979年にはついに亡命した。このことは、ソーサの「歌」の影響力の大きさを示している。本発表では、ソーサの人格形成期のアルゼンチンの社会と文化の変化も背景として考慮しながら、1979年までのレパートリーのなかの女性像と女性の作者に注目し、階級や人種

との交差を意識しながら読み解いていく。

2018年10月に何千人もの人々が、キャラバンを組んで中米ホンジュラスに位置するサンペドロ・スーラから、メキシコを縦断し、アメリカ合衆国へ歩いて行く映像は、今でも我々の記憶に生々しく残っていることだろう。このキャラバンの特徴として挙げられるのが、女性や子ども、そして家族で移動する人々の割合が、男性単身の移動者を上回っていた、ということである。そこに象徴されているのは、女性の国際移動がどれほど危険と暴力を伴うものか、ということ。そして、それを緩和する何らかの方法を、女性を筆頭とする子どもや老人など社会的弱者たちが、キャラバンという集団移動に、非正規移民の可視化と相互援助の可能性を見出した、ということだった。

以上のように、浅倉の発表では、中米移民女性の事例をもとに、移動という人間の習性とも言える基本的人権が、どのように侵害されてきたかを、ジェンダーの視点から考察していく。

メキシコで15年以上も続く、いわゆる「麻薬戦争」は、市民の間に様々な被害をもたらしてきた。死者、行方不明者の数は、2021年はパンデミックのなかにあってもさらに増え、また軍・警察など当局による強制失踪、不当逮捕、拷問被害など人権侵害も続発している。

麻薬戦争が引き起こす暴力は様々な側面で極度にジェンダー化され、加害者、被害者、さらに行方不明者を捜索する市民団体などにおいても、伝統的とされるメキシコのジェンダー概念が大きく反映されている。女性殺人に関しては、メキシコではその約6割は組織犯罪が関連しているとされる。行方不明者の数は圧倒的に男性が多い一方で、12～16歳に限ってみてみると、女性の方が多くなっている点など、ジェンダー暴力の構造がそこに見て取れる。

このように、山本の発表においては、終わりの見えない暴力と不処罰の中における、ジェンダーのステレオタイプ化が生み出す偏見や差別と同時に、ジェンダー概念の変化や多様化といったものを考察していく。